

『新撰六帖』における為家の万葉歌句撰取

―『古今六帖』『五代簡要』の位置―

福田 智子

『新撰六帖』（鎌倉中期成）は、『古今六帖』（平安中期成）の歌題に拠り詠作された類題和歌集である。『古今六帖』は、約四五〇〇首の所収歌中、約四分の一を万葉歌が占める。

『新撰六帖』が、『古今六帖』の和歌本文をも視野に入れて作歌したと想定されることから、藤原為家の『新撰六帖』における万葉歌句撰取の様相を、若年時に学んだ『五代簡要』引用万葉歌句をも含めて考察した。

その結果、為家の『新撰六帖』における万葉表現は、『五代簡要』における学びの上に積み重ねられ、また、『古今六帖』所収万葉歌を参看しながら、その範囲をも越えた表現の系譜の上に展開されていることがわかった。

この為家の作歌のあり方は、鎌倉中期以降、『古今六帖』の位置付けが、「作歌の手引き書」から、新たな類題和歌集の編纂材料、出典考証の対象へと移行していくことを示唆している。

なお、為家が『万葉集』そのものから直接学んで作歌した形跡は見出しにくく、今後は『新撰六帖』の他の歌人との比較検討が必要だろう。

一 問題の所在

『新撰和歌六帖』（以下、『新撰六帖』）は、家良・為家・知家・信実・光俊の五人の歌人によって、五二七題の歌題について、一人一首ずつ詠んだ歌をまとめた類題和歌集である。歌題は基本的に『古今和歌六帖』（以下、『古今六帖』）に拠るが、五人の歌人たちは、歌題のみならず、『古今六帖』所載和歌本文も視野に入れ作歌したらしいことが指摘される¹⁾。

その『古今六帖』は、二五項五一七題、約四五〇〇首のうち、約四分の一を万葉歌が占める。ということは、『新撰六帖』の作者にとつて、『古今六帖』所収万葉歌は、万葉歌享受のひとつの契機になったであろうことは、想像に難くない。そこで、本稿は、『新撰六帖』の作者のひとり、藤原為家に着目し、

万葉歌句撰取の様相を、『古今六帖』所収万葉歌との関わりという視点から考察するものである。

為家の万葉享受を考えると、その父、定家が撰んだ『五代簡要』の存在は、看過できないであろう。承元三年（一一二〇九）、為家十二歳の時に撰せられた『五代簡要』は、『万葉集』『古今集』『後撰集』『拾遺集』『後拾遺集』の五つの歌集から、歌句（もしくは和歌）を抄出したものである。定家の作歌のための備忘録とされ、『万葉集』からは八五四首が引用されている。為家が、初めて万葉歌の本歌取りを披露したのは、建保元年（一一二一三）『内裏歌合』で、為家一六歳の時であったというが、その十年ほど後、二五歳の貞応二年（一一二二三）に、『為家の初学と家業継承を象徴する作品』⁽³⁾である『為家千首』が詠作される際には、為家の万葉歌撰取の範囲は、『五代簡要』に引用された歌句に限られることが指摘されている。⁽⁴⁾これは、『五代簡要』引用歌句以外の表現をも用いるという『古今集』の歌句撰取のあり方⁽⁵⁾とは一線を画している。

為家の『新撰六帖』詠作期間を、寛元元年（一一四三）十一月十三日から翌二年二月二十四日までとすれば、⁽⁶⁾齢四十の半ばであり、当然、『為家千首』以降に積み上げてきた研鑽の跡が見出されるはずである。また、『新撰六帖』の五人の作者の中で、「為家の詠作開始が最も早く、『古今六帖』の歌題に若干

の取捨選択をも加えたという。『新撰六帖』詠作の主導者とも目される為家の作歌活動に、『古今六帖』所収万葉歌は、どのように関わってくるのか。『新撰六帖』の為家歌に見られる万葉歌句を具体的に把握し、『古今六帖』が為家に提示し得る作歌のきっかけ、表現材料は何であったのか、そして、それらの万葉歌句は、為家の時代までの表現の系譜にどのように位置付けられるのか、その一端を明らかにしたい。それは、類題和歌集としての『古今六帖』を、あらためて、鎌倉中期の和歌活動の中に位置づけることにもなるはずである。

二 『新撰六帖』の為家歌と『古今六帖』『五代簡要』

『為家千首』との関係

『新撰六帖』詠作に際し、『古今六帖』が、歌題のみならず和歌本文としても、直接的な詠歌の手本になった——もつとも、『新撰六帖』の作者たちが見た『古今六帖』は現存する写本の姿そのままであるとは限らないが——と、まずは考え得るとしても、前述のとおり、こと為家の万葉歌撰取に関しては、『新撰六帖』詠作のための『古今六帖』参看の前に、『五代簡要』が重要な存在であったと見られる。そこで、為家が『新撰六帖』で用いた万葉歌句について、『古今六帖』における所収の

有無を主軸に、『五代簡要』引用歌句と『為家千首』における実作例を視野に入れながら、(イ)から(へ)の六つに分類して考察することにする。

まず、『新撰六帖』の為家歌の万葉歌句が、直接参考したと想定される『古今六帖』にある場合について三つに分ける。すなわち、(イ)『五代簡要』にあり『為家千首』の実作もある場合、(ロ)『五代簡要』にはあるが『為家千首』の実作はない場合、(ハ)『五代簡要』になく、従って『為家千首』の実作もない場合である。

一方、『古今六帖』に収められていない万葉歌句の利用についても、先の三つの分類と同様に、(ニ)『五代簡要』にあり『為家千首』の実作もある場合、(ホ)『五代簡要』にはあるが『為家千首』の実作はない場合、(ヘ)『五代簡要』になく、従って『為家千首』の実作もない場合の三つに分ける。

これら六つの観点から分類した上で、鎌倉中期という時代性を考慮し、それまでに詠まれてきた和歌表現の系譜や、為家周辺の歌人の作歌にもできる限り目配りしながら、具体的に用例を見ていくことにしよう。⁽⁸⁾

三 分類(イ) 〈『古今六帖』有・『五代簡要』有〉 『為家千首』有

まず、為家が『新撰六帖』で用いた万葉歌が、『五代簡要』『為家千首』『古今六帖』に収められている場合である。

① 『新撰六帖』第六帖、二二九七番「しひ」

いつのまにたれたねまきてかたをかのみかひのみねにしひるしひし⁽⁹⁾

この為家歌は、傍線部分を、次の『古今六帖』同題にも載る万葉歌に拠っている。現存する『古今六帖』伝本では、わずか三首しか載らない「しひ」題の歌の中の一⁽¹⁰⁾首である。

『古今六帖』第六帖、四二六一番「しひ」 人丸

かたをかのみかひのみねにしひまくはことしの夏のかげにせんかも

『古今六帖』所収万葉歌が、「ことしの夏のかげにせん」として蒔いた権を、『新撰六帖』では、「いつのまに」誰が種を蒔いて、「しひしひ」が「夏のかげ」となっているのだろうと、時の経過を権の繁りに見出す。

この『古今六帖』所収万葉歌は、実は『万葉集』では、次のような訓になっている。

『万葉集』卷七、一一〇三（一〇九九）番

片岡之 カタヲカノ 此向峰 コナタノミネニ 椎蒔者 シヒマカバ 今年夏之 コトシノナツノ 陰尔将比疑 カゲニナミムカ

かたをかの このむかつをに しひまかば ことしのなつ

の かげにならむか

問題は第二句で、現代の新訓では「このむかつをに」、西本願寺本では「コナタノミネニ」⁽¹¹⁾ というように、訓の異同が見られるのである。

『古今六帖』所収万葉歌の「むかひのみねに」の訓は、元暦校本や神宮文庫本、細井本にあり、先に挙げた西本願寺本にも、「此向」の左に「ムカヒ古」という傍書がある。⁽¹²⁾ 『古今六帖』諸本本文は安定しており、これらの『万葉集』伝本の訓の流れを汲むものである。

そして、定家の『五代簡要』が、この万葉歌を、『古今六帖』本文と同一の訓で引用しており、さらに『為家千首』では、この万葉歌句を用いて作歌している。

『五代簡要』「かたをかの むかひのみねに しるまか⁽¹⁴⁾」

『為家千首』七八一番

かたをかのむかひのみねのしひしはのつれなきいろにいく
よこふらん

『新撰六帖』の「しひしば」という語も、すでに『為家千首』で用いている。『新撰六帖』において、為家が「しひ」題の歌

を詠もうとする時、同題に載るこの『古今六帖』所収万葉歌は、為家にこの万葉歌を想起させるきっかけにはなったであろう。

和歌表現史においては、「しひ」題の歌は決して多く詠まれているわけではない。歌語として独自のイメージを獲得、発展させることが難しかったのだろう。『古今六帖』でも、前述のとおり、「しひ」題の歌は三首しか収められていないのであった。そのような状況の中で、『新撰六帖』のこの為家歌が、後の『現存和歌六帖』（以下、『現存六帖』）六六七番にも再録される。「しひ」題の歌が、六帖題和歌においてかろうじて命脈を保っていることには、留意しておきたい。⁽¹⁵⁾

同様の例をもうひとつ示そう。

②『新撰六帖』第六帖、二六二七番 「もず」

かぜわたるをばながすゑに鳴なきて秋のさかりと見ゆる野
べかな

この為家歌の傍線部が、次の万葉歌の上句を踏まえたものであることは明白である。

『万葉集』卷十、一二七一（二一六七）番

秋野之 アキノノ 草花我末 クサバナカスエニ 鳴百舌鳥 ナクモズノ 音聞濫香 コエキクラムカ 片聞吾妹 カタキクワギモ

あきののの をばながうれに なくもずの こゑききけむ
か かたきけわざも

ただし、現代の新訓では、第二句を「をばながうれに」とする。『校本萬葉集』では当該箇所は「すゑ」で、訓の異同は見当たらない。『古来風体抄』一〇八番や『五代簡要』においても、『万葉集』本文の「末」をそのまま読んだ「すゑ」の訓である。

『五代簡要』「おはながすゑに なくもす」

為家は、この『五代簡要』引用本文を中心に、この万葉歌の舞台である「秋の野」をも取り入れながら作歌している。

「をばな」と「もす」との組み合わせは、この万葉歌を発端とすると見られるが、平安期の用例はまず見当たらず、鎌倉初期、『千五百番歌合』の次の歌を待つことになる。

『千五百番歌合』一七三番「冬一 八百六十二番 右

兼宗卿

霜がれのをばながすゑになくもすは秋のなごりをとふにや
あるらん

そして、後に為家も、『為家千首』において実作に及んでいる。

『為家千首』三四八番 「秋二百首」

のべみればをばながすゑにもすなきてあきになりゆく世の
けしきかな

『為家千首』の為家歌は、万葉歌句を用いているという点はもちろんそうであるが、直接的には、『千五百番歌合』の兼宗歌

をも念頭に置いていえると言えよう。すなわち、兼宗の「秋のなごり」から、『為家千首』の「あきになりゆく」というように、秋という季節の推移をずらして作歌しているのである。そして『新撰六帖』では、「秋のさかり」というように、為家歌はバリエーションを生み出している。

この万葉歌自体は、『古今六帖』にも見出される。

『古今六帖』第六帖「もす」

春さればもすの草ぐきみえずとも我はみやらん君があたり
をば（四四九一）

秋の野のをばながすゑに鳴くもすのこゑきくむか行聞く吾
妹（四四九二）

『新撰六帖』と同じく、「もす」題の歌である。そこには二首の歌しか収められていないが、四四九一番の方も、巻十、一八九七（一九〇一）番の万葉歌であった。どちらの歌に着目するかという為家の判断には、もちろん歌の巧拙もあつただろうが、その裏には『五代簡要』引用歌句であるか否かが作用した可能性はあるだろう。なお、為家自身の手になるかとされる『万葉集佳詞』¹⁶にも「おばながすゑになくもすのこゑきくむかとあり」とある。

さて、『新撰六帖』の為家歌には、異なる題の万葉歌を参考にしたらしい例もある。

③『新撰六帖』第五帖、一三三二番「しめ」

むすばばやわがしめゆひしわか草のにひたまくらを人にふるさで

この『新撰六帖』「しめ」題の為家歌は、傍線部を次の万葉歌の初二句に拠っている。

『万葉集』卷十一、二五四七（二五四二）番

若草乃 ワカクサノ 新手枕乎 ニヒタマクハラ 卷始而 マキソメテ 夜哉将間 ヨラヤケヲ 二八十二不在国 ニククアラナクニ

わかくさの にひたまくらを まきそめて よをやへだてむ にくくあらなくに

俊成『古采風体抄』一、二八番にも載るこの万葉歌については、すでに傍線部の歌句が『五代簡要』に取り上げられ、さらに同じ句を用いた歌が『為家千首』に見出される。

『五代簡要』「わかくさの」にみたまくらを まきそめて

『為家千首』七〇五番、「恋二百首」

けふむすぶにひたまくらのわかくさにさてもつゆぞ袖はぬれける

この万葉歌の表現は、俊成・定家・為家というように、御子左家三代にそれぞれ着目されてきた表現と見做されよう。

『古今六帖』においては、第五帖「一夜へだつ」題に、この万葉歌は配されている。

『古今六帖』第五帖、二七四九番「一夜へだつ」

わかくさのにひたまくらをまきそめてよをやへだてんにくからなくに

為家は、「しめ」題の歌を、新妻を独り占めたいという発想から連想の糸をたぐり、万葉歌の「わかくさの」にひたまくら」という表現に思いを巡らせたものと考えられる。

そもそも、この万葉歌句は、『新撰六帖』成立までの用例としてそれほど多くはない。次の『栴葉和歌集』（一二三七年成立）と、『新撰六帖』「たまくら」題の家良歌をわずかに見出すのみである。

『栴葉和歌集』六二五番 「たびの歌のなかに 湛俊法師」

わかくさのにひたまくらのゆふつゆに月もやどかるむさし
ののはら

『新撰六帖』第五帖、一七〇一番「たまくら」 家良

あだにおく露もちらすなわか草のにひたまくらのかはすばかりを

ちなみに、右の『新撰六帖』歌の作者、家良は、為家に次いで『新撰六帖』を詠作したと考えられている¹⁸。家良がこの万葉表現を「たまくら」題の歌に用いたのは、あるいは、為家の「たまくら」詠にこの歌句が用いられていないことを知った上でのことであったかもしれない¹⁹。

なお、『古今六帖』の「一夜へだつ」題に対応する、『新撰六

帖』の「一夜へだてたる」題における為家歌は、次のとおりである。

『新撰六帖』第五帖、一四一七番 「一夜へだてたる」

あふことのあしのかりねよふた夜とは見えもみえずもつづ
かざりけり

ここで詠まれている「あしのかりね」といえば、次の『百人一首』八八番の他、『定家八代抄』一〇七〇番にも採られた『千載集』の歌が想起されよう。

『千載集』卷第十三恋歌三、八〇七番

撰政右大臣の時の家の歌合に、旅宿逢恋といへるこ
ろをよめる 皇嘉門院別当

なにはえのあしのかりねの一よゆゑみをつくしてや恋ひわ
たるべき

また、俊成にも、『新古今集』に採られた次のような歌がある。

『新古今集』卷第十羈旅歌、九三二番 (『定家八代抄』八
二五番にも)

守覚法親王家に、五十首歌よませ侍りける旅歌

皇太后宮大夫俊成

夏かりのあしのかりねもあはれなりたまえの月の明がたの
空

為家は、「わかくさのにひたまくら」と同様に、御子左家によ

く用いられている「あしのかりね」を、『新撰六帖』の「一夜へだてたる」詠に用い、「わかくさの……」の方は、別の歌題に用いるというように、表現の割り振りを考えていたとも捉え得るだろう。「あしのかりね」の歌は、『新撰六帖』以後も、為家による実作が『為家集』に見出される⁽²⁰⁾。

四 分類(口) 〈『古今六帖』有・『五代簡要』有・

『為家千首』無〉

次は、『為家千首』には実作例はないが、『五代簡要』『古今六帖』がともに収めている万葉歌句の利用である。

④ 『新撰六帖』第六帖、一九四二番「にこ草」

あしがきのなかのにこ草まぢかくてしげる思ひのほどはし
らなん

この「にこ草」題の為家歌は、次の万葉歌の初二句を、句の位置もそのまま傍線部に用いている。それは、『五代簡要』における引用歌句でもある。

『万葉集』卷十一、二七七二(二七六二)番

蘆垣之アシカキ 中之似ナカノニコウサ 児草ニコヨカニ 尔故余漢ワレトエミシテ 我共ヒトニシラルナ 咲ヒトニシラルナ 為而 人尔所知名
あしかきの なかのにこぐさ にこよかに われとゑまし
て ひとにしらゆな

『五代簡要』「あしかきの なかのにこぐさ」

『古今六帖』では、同じ「にこぐさ」題の歌、三首中の一首として収められる。

『古今六帖』第六帖「にこぐさ」

いくしかをとむるかはべのにこぐさのみわかきがうへにさ
ねしことはも(三五七九)

あしがきのなかのにこぐさにこよかにわれとよみして人に
しらるな(三五八〇)

秋風になびくかはべのにこぐさのにこよかにしもおもほゆ
るかな(三五八一)

実は、三五七九番は、『万葉集』巻十八、三八九六(三八七四)番、また、三五八一番は、『万葉集』巻二十、四三三三(四三〇九)番の歌である。だが、それらの歌句は『五代簡要』には引用されていない。

そもそも「にこぐさ」の用例はごく少ない。為家の実作としては、『新編国歌大観』を検する限り、この『新撰六帖』を俵たねばならない。為家がこの歌を詠んだのも、「にこ草」題が六帖題として設定されているからだっただろう。どうやら『古今六帖』は、その作歌の素材として、為家に『五代簡要』所載万葉歌句を思い起こさせたようである。

なお、『新撰六帖』の後に編纂された『現存六帖』でも、明

珍法師が、「にこ草」題の歌を詠んでいるが、為家と同じ歌句に着目している。

『現存六帖』三五番「にこ草」 明珍法師

(『現存和歌六帖抜粹本』二二六八番にも)

我がおもふ人しるらめやあしがきのなかのにこぐさしたに
もゆとも

つまり、「あしがきのにこぐさ」詠は、『万葉集』以降、『夫木和歌抄』における再録を除けば、六帖題和歌にのみ継承された歌句と言えようか。

ところで、『古今六帖』所収万葉歌の本文は、時として、万葉仮名表記から離れた本文を取ることがある。²²⁾ その場合、『新撰六帖』の為家は、『古今六帖』を採るといふよりも、『五代簡要』引用本文を念頭に作歌しているようである。

⑤ 『新撰六帖』第六帖、二三八七番 「たち花」

たち花のかをかぐはしみちる花にかけふむみちはゆきもや
られず

右の為家歌は、傍線部を次の万葉歌に拠ると見られる。

『万葉集』巻二、二二五(二二五)番 (三方沙弥)

橘之 蔭履路乃 八衢尔 物乎曾念 妹尔不相而

たちばなの かげふむみちの やちまたに ものをぞおも
ふ いもにあはずして

『校本萬葉集』では、傍線部に問題となる異同は見当たらない。だが、『古今六帖』では、当該第二句の本文は、万葉歌とは異なっているのである。

『古今六帖』第六帖、四二五八番 「たちばな」

たちばなのもとにかけふむやとまたに物をぞおもふ人し
られず

『古今六帖』諸本においては、写本は一律に「もとにかけふむ」である。だが、寛文九年版本は「かけふむ道の」というように、万葉本文に一致する。版本は、後に万葉本文によって校訂されたのだろう。⁽²³⁾

この万葉歌は、『五代簡要』にも歌句が引用されている。

『五代簡要』「たちはな かけふむみち」

この『五代簡要』引用本文が、為家の念頭にあった可能性は大きかろう。『新撰六帖』詠作以前に、これらの句を、為家が実作に用いた例は、未だ管見に入らない。『古今六帖』の「たちばな」題の歌は、四二五〇番から四二五九番の全部で十首列挙されているが、為家が、その中から当該万葉歌に着目したとしても、『古今六帖』写本系本文ではなく、『五代簡要』引用歌句で享受している。

次は、「ともし火の かげにかがよふ」という歌句に着目しよう。和歌表現としてきわめて稀な表現であるが、『新撰六帖』

の為家歌では、次のように詠まれている。

⑥ 『新撰六帖』第六帖、二二三三番 「なつむし」

はかなさのたぐひもかなしともし火のかげにかがよふ夜は
のなつ虫

為家が詠んだこの「なつむし」題の歌は、後に『現存六帖』三二四番にも問題に再録されることになる。傍線部の歌句は次の万葉歌に拠り、『五代簡要』もその部分を引用する。

『万葉集』卷十一、二二六五〇（二二六四二）番

灯之トモシビ 陰尔蚊蛾欲布カゲニカガヨフ 虚蟬之ウツセミノ 妹蛾咲状思イモガエイリシ 面影尔所見オモカゲニミユ

ともしびの かげにかがよふ うつせみの いもがままひ
し おもかげにみゆ

『五代簡要』「ともし火の かけにかかよふ うつせみ」

『新撰六帖』では、万葉歌の「うつせみ」を、歌題の「なつむし」に代えて詠んでいる。為家が歌材としてこの万葉歌句を認識したのは、まず『五代簡要』だろうが、『新撰六帖』に至る間の実作は未だ見当たらない。

この歌句は、『古今六帖』では「おもかげ」題に見える。

『古今六帖』第四帖、二〇六六「おもかげ」

ともしびのかげにかがよふうつせみのいもがお
もかげオモカゲこお風ゆコオカゼ

写本系伝本では下句の本文が乱れているが、「ともしびの」「か

げにかがよふ」というきわめて珍しい万葉表現が、六帖題和歌によりかろうじて継承されているさまが窺える。

五 分類(ハ) 〈『古今六帖』有・『五代簡要』無・

『為家千首』無〉

これまで取り上げてきた(イ)(ロ)の場合は、『新撰六帖』為家歌が、いずれも『五代簡要』に引用された万葉歌句を用いている例であった。その一方で、『五代簡要』に引用されず、従って、『為家千首』にも実作がない万葉歌句が、『古今六帖』には収められ、為家の『新撰六帖』歌に用いられている例は、為家の歌作りにおける『古今六帖』本文の位置を、より明確に示すことになろう。たとえば、次の例である。

⑦ 『新撰六帖』第六帖、二五二番「あせみ」

たきのうへのあせみの花のあせ水にながれてくいよつみの
むくひを

傍線部は、次の万葉歌の第三句、第四句に依拠したものと見られるが、歌題にもなっている語「あせみ」について、『万葉集』諸本に本文異同が生じている。

『万葉集』卷十、一八七二(一八六八)番
川津鳴カハツナク 吉野河之ヨシノカハ 滝上乃タキノノ 馬酔之花曾ウマゾシノハナゾ 置末勿勤オクシマモトキ

かはづなく よしののかはの たきのうへの あしびのは
なぞ はしにおくなゆめ

すなわち、現代の新訓では「あしび」であるが、『校本萬葉集』に拠れば、底本の寛永二十年版本は「ツ、シ」と訓む一方で、類聚古集・神宮文庫本の本行は「あせひ」、大矢本・京都大学本も「馬酔」の左に「あせみ」と傍書され、さらには廣瀬本の片仮名別提訓も「アセミ」である。

そもそも、『古今六帖』は、類聚古集などに見られる「あせみ」を歌題として、三首の和歌を収めている。そのうちの一首が、前掲の万葉歌であった。²⁴⁾

『古今六帖』第六帖「あせみ」

かはづ鳴くよし野のかはのたきの上のあせみの花ぞてなふ
れそゆめ (四三一九)

我がせこにわがこふらくはおくやまのあせみのはなの今さ
かりなり (四三二〇)

はるやまのあせみのはなのにくからぬ君にはしゑやよりぬ
ともよし (四三二一)

『古今六帖』諸本文は、「あせみの花(はな)」でほぼ異同はなく、²⁵⁾歌題の「あせみ」が、ここでは、和歌本文自体を固定する役割をも担っている。為家は、『新撰六帖』で、「たきのうへのあせみの花」という表現を用い、「あせみの花」から同音

の「あせ水」を導くことで、上句を仕立てている。⁽²⁶⁾

また、『新編国歌大観』を検しても、『新撰六帖』の為家歌に至るまで、「たきのうへの あせみの花」という表現を用いた例は、未だ管見に入らない。そうすると、為家がこの万葉歌に着目したきっかけを、『古今六帖』の同題歌に求める余地はあるであろう。

次の「には」題の歌も同様の例として挙げられよう。

⑧ 『新撰六帖』第三帖、九四二番 「には」

ふねかよふあしまにすだくにはどりのうくもしづむもわが
こころかは

為家のこの歌の傍線部は、次の万葉歌句に由来しよう。

『万葉集』卷四、七二八（七二五）番

二宝鳥乃ニホドリノ 潜池カヅクヘスガクイケミツ 情有者ココロアラバ 君尔吾恋キミニワガコヒ 情示左祢ココロシメサネ

にはどりの かづくいけみづ こころあらば きみにあが
こふる こころしめさね

ただし、第二句の「かづく」は、類聚古集や神宮文庫本に「すたく（スタク）」の訓を見出す。⁽²⁷⁾これは、『古今六帖』所載本文と一致するところである。

『古今六帖』第三帖、一五〇三番 「には」

にはどりのすだくいけみづ心あらばきみにわがこひこころ
しめさね

『古今六帖』諸本文は、いずれも「すたく」で、安定した本文を保っている。「潜」の字は、現代の新訓では「かづく」と読んでおり、万葉仮名表記の訓としては適切であろう。これを「すだく」と読むのは、文字が有する意味から外れるが、これがいわゆる平安万葉の姿である。⁽²⁸⁾『五代簡要』に引用されないこの歌句も、『新撰六帖』の為家歌においては、これらの「すだく」本文の流れを汲んで詠まれたものと見られる。

なお、和歌表現として、「にはどり」は、「すだく」か、それとも「かづく」か、という点については、『堀河百首』「杜若」題に見える、次の連続する二首の歌が示唆的である。

『堀河百首』二六三・二六四番 「杜若」

には鳥のかづく池辺のかきつばた是こそ夏のへだてなりけ
れ（仲実）

には鳥のすだくみぬまの杜若人へだつべきわが心かな（俊頼）

十二世紀初頭には、どうやら両用が流布していたようである。さらに、次の「をはぎ」題の歌でも、六帖題和歌がかるうじて歌語の命脈を継承した跡が見える。

⑨ 『新撰六帖』第六帖、二一四二番 「をはぎ」

かすが野をはぎつみけりなら山のこのはるかせのゆるく
吹くらし

後の『現存六帖』にも収められた為家歌である。⁽²⁹⁾ 初句と第二句の傍線部は、次の『古今六帖』所収万葉歌に一致する。

『古今六帖』第六帖、三九一九番 「をはぎ」⁽³⁰⁾

かすが野にけぶりたつみゆをとめごしはるののおはぎつみ
てくるらし

『古今六帖』では、唯一の「をはぎ」題の歌である。遡って万葉歌を見てみよう。

『万葉集』卷十、一八八三（一八七九）番 詠煙

春日野カスガノノ 煙立所見ケアリタツソミ 媿孀等四ウツメノ 春野之菟芽子ハルノノキハギ 採而煮良ツミテニラ
思文シモノ

かすがのに けぶりたつみゆ をとめらし はるののうは
ぎ つみてにらしも

肝心の「菟芽子」の訓は、現代の新訓では「うはぎ」であるが、『万葉集』諸本は「ヲハキ」であり、⁽³¹⁾『古今六帖』の歌題および和歌本文に通じる。また、『新撰六帖』以前に、為家がこの歌句を実作に用いた形跡は、現時点では見当たらない。そうすると、六帖題と『古今六帖』に掲載された、わずか一首の「をはぎ」題の万葉歌によって、為家が、新たな万葉歌句に目を向けることになったという見方もあり得るであろう。

なお、「かすが野」で「をはぎ」を「つむ」という初二句以外にも、万葉歌との関係において想起すべき表現がある。ま

ず、次の『古今六帖』「はるのかぜ」題の歌を見よう。

『古今六帖』第一帖、三八八番 「はるのかぜ」

春風ハルノカゼのいたくふくらしなだのあまのつりする小舟さしかへ
るみゆ

この歌の初二句「春風の……ふくらし」という表現は、為家のこの「をはぎ」題の歌の下旬の骨組みに相当する。『古今六帖』の「いたく」吹く風とは対照的に、『新撰六帖』の春風は、「ゆるく」吹くらしいというのである。

もつとも、この歌は、『万葉集』では、「はるかぜ」を「あゆのかぜ」と訓じている。

『万葉集』卷十七、四〇四一（四〇一七）番

東風アユノカゼ（越俗語東風謂之安由乃可是也）伊多久布久良之イタクフクアラシ

奈具乃安麻能ナゴノアマノ 都利須流乎夫祢ツリスルヲフネ 許芸可久流見由コギカククミユ

あゆのかぜ いたくふくらし なごのあまの つりするを
ぶね こぎかくるみゆ

そして『五代簡要』が引用するのは、この万葉歌の初句と、第三句である。

『五代簡要』「あゆの風 なごのあま」

「東風」を、『万葉集』では「あゆのかぜ」の読ませたいところのようだが、『新撰六帖』の為家は、『古今六帖』の題や本文と同じ「はるかぜ」を用いる。「このはるかぜの」という七音句

に当てはめるといふ都合もあったのだろうが、『五代簡要』が「あゆの風」という句を引用しているだけに、為家がそれをそのまま用いていない点には留意したい。

このように、『五代簡要』に引用された万葉歌であっても、為家が、引用部分以外の歌句を取り入れて歌作した例は他にもある。「かも」題の歌である。

⑩ 『新撰六帖』第三帖、九三七番 「かも」

ひくるればやまかげくだるかはあしのうきねをさむみかも
ぞなくなる

傍線部は、次の万葉歌に拠る。『新古今集』六五四番にも再録される歌である。

『万葉集』卷三、三七八（三七五）番

湯原王芳野作歌一首

吉野尔有 夏実之河乃 川余杼尔 鴨曾鳴成 山影尔之旦
よしのにある なつみのかはの かはよどに かもぞなく
なる やまかげにして

そして『五代簡要』は、『新撰六帖』で為家が入れている万葉歌の初二句を引用するのである。

『五代簡要』「よしのなる なつみのかは」

ただし、『五代簡要』が引用する句の実作例は、『新編国歌大観』の範囲内ではあるが、為家はおろか定家にも未見である。

先の『新撰六帖』⑨の考察で取り上げた『五代簡要』も、特殊語彙や地名であったが、その類の歌句は、覚え書きがあるとしても、やはり実作には用いにくいといった面がありそうである。

『古今六帖』では、「かも」題の歌、一四八三番から一四九六番の全十四首中の一首として、この万葉歌を挙げている。

『古今六帖』第三帖、一四九一番 「かも」

よしのなるなつみのかはよどにかもぞ鳴くなる山かげにして

為家が、『五代簡要』で引用されていない「かもぞなくなる」「やまかげ」の部分を利用して実作するには、やはり、この『古今六帖』所収万葉歌の存在は見逃せないであろう。

さて、為家には、『五代簡要』にない万葉歌句でも、異なる題の『古今六帖』歌を念頭に詠作に臨んだと思しき『新撰六帖』歌がある。次は、『古今六帖』「夏草」題の万葉歌の表現を、『新撰六帖』では「なつの」題に用いた例である。

⑪ 『新撰六帖』第二帖、六七二番 「なつの」

うくつらき世の人ごとにくらぶれば夏野の草はしげしともみず

この為家歌の傍線部分は、次の万葉歌の上句に拠ると見られる。

『万葉集』卷十、一九八七（一九八三）番 寄草

人言者 ヒトゴトハ 夏野乃草之 ナツノノクサノ 繁友 シゲトモ 妹与吾師 イモトワトシ 携宿者 タツサハリネバ

ひとごとは なつののくさの しげくとも いもとあれと
し たづさはりねば

『人丸集』『赤人集』にも載り、勅撰集では『拾遺集』に採録される歌である。³²⁾

一方、『古今六帖』には、「夏草」題の歌として収められる。

『古今六帖』第六帖、三五五一番「夏草」

人ごとはなつののくさのしげくともいもと我としたづさはりなば

「人ごと」「なつ」「くさ」「しげ（く）」の組み合わせは、『新撰六帖』以前は、『式子内親王集』「恋」の次の歌に見えるのみである。

『式子内親王集』一七六番「恋」

かりにだにまだむすばねど人ごとの夏野の草としげき比かな

『古今六帖』の「夏草」題と、『新撰六帖』の「なつの」題とは、第二帖と第六帖とで位置が離れてはいるものの、いずれも季節は同じ「夏」で、「草」と「の（野）」との違いはあるが、指し示す対象の重なりは少なくない。異なる題での詠とは言え、表現の連想はしやすいだろう。そして、表現の系譜として

は、『万葉集』から平安中期の『古今六帖』『人丸集』『赤人集』、『拾遺集』を経て、『式子内親王集』に実作を見出しつつ、為家の『新撰六帖』歌に至るといふ流れが浮かび上がってくる。

なお、『新撰六帖』「なつくさ」題の為家詠は次のようである。

『新撰六帖』第六帖「なつくさ」一九二二番

夏ふかき山のかげ草とにかくにこととしげきはわが世なり
けり

「夏ふかき」「草」「こととしげき」という表現は、前掲『万葉集』一九八七（一九八三）番を踏まえたと思われる。

その一方で、「山のかげ草」という語句は、次の家持歌の影響が大きかろう。

『新古今集』卷第十三恋歌三、一一一三番

題しらず

中納言家持

あしびきの山のかげ草むすびおきてこひやわたらむあふよしをなみ

もつとも、この歌は、『家持集』三二三番には載るが、『万葉集』には見せず、『新古今集』に採歌されているのを受けて、さらに『定家八代抄』八五九番に収載されている。これも万葉歌人、家持の和歌として、表現が享受されていく経路のひとつであろう。

さて、為家詠に『古今六帖』の異なる題の万葉歌が用いられる例は他にもある。『古今六帖』の「ゆき」題に配された万葉歌を『新撰六帖』では「むめ」題に用いた例である。

⑫ 『新撰六帖』第六帖、二二三三七番 「むめ」

わがせこにまつつげやらん梅のはなあかぬにほひをきても
みるかは

『古今六帖』第二帖、七三九番 「ゆき」

わがせこに見せんと思ひし梅のはなそれとも見えす雪のふ
れば

『新撰六帖』の歌は、後に『現存六帖』にも再録された。⁽³³⁾そして、この『古今六帖』の歌は、次の万葉歌である。

『万葉集』卷八、一四三〇（一四二一六）番

ワガセコニ 令見常念之 梅花 其十方无所見 雪乃零有者
わがせこに みせむとおもひし うめのはな それともみ
えず ゆきのふれば

この万葉歌は、『後撰集』以下、歌集や歌論書に再録されることが少なくない。⁽³⁴⁾御子左家においても、『古来風体抄』八六番・三〇一番や『定家八代抄』四二番に取り上げられており、実は『五代簡要』も次の歌句を引用している。

『五代簡要』「みせむと思し 梅花 それとも見えす」

ただし、『五代簡要』では、「梅花」を「みせむ」とすれど「見

えず」という表現の対に着目しているが、為家歌はそれを生かしてはいない。

『古今六帖』がこの万葉歌を「ゆき」題に収めるのは、白梅が雪に紛れて見分けられないことで、視覚的に「ゆき」の白さに主題を求めたためであろう。これを『新撰六帖』では、「梅のはな」の「にほひ」という嗅覚に焦点を合わせて、主題を「梅のはな」に持って来たわけである。「梅の花」を、初二句の「わがせこに」「見せん」から、「わがせこに」「つげやらん」と発想したところに、『新撰六帖』がこの万葉歌を念頭に詠作に及んだとする所以がある。⁽³⁵⁾

『新撰六帖』と共通する表現や発想の梅花の歌は、先行例として、たとえば次のような歌がある。

『林葉集』（俊恵）六七番

我がせこは手をりても見よ梅の花それやとがむる袖の香な
らぬ⁽³⁶⁾

為家は、『五代簡要』引用歌句そのものを利用するのではなく、この表現の系譜に連なりながら詠歌したのである。もちろん、「ゆき」から「むめ」への主題の移行は、典型的な「見立て」の表現手法が根底に流れている。

また、為家の『新撰六帖』「おきな」題の歌には、『古今六帖』「かがみ」題にもある万葉歌句が用いられている。

⑬ 『新撰六帖』第二帖、八五七番 「おきな」

あさなあさなしらぬおきなのますかがみめにみすさまに
つもとしかな

『古今六帖』第五帖、三三二番 「かがみ」

ますかがみてにとりもちてあさなあさなみんときさへやこ
ひのしげけん

『万葉集』卷十一、二六四一（二六三三）番

真十鏡 手取持手 朝 旦 将見時禁屋 恋之将繁

ますかがみ てにとりもちて あさなさな みむときさへ

や こひのしげけん

ただし、「ますかがみ」「あさなあさな」という句の組み合わせは、『万葉集』に他にもある。

『万葉集』卷十一、二五〇七（二五〇二）番

真鏡 手取以 朝朝 雖見君 飽事無

ますかがみ てにとりもちて あさなさな みれどもきみ

は あくこともなし

いずれも卷十一の歌で、上句は全く同じである。この二五〇七番は、『古今六帖』には収められないが、『五代簡要』に取り上げられている歌句は、歌順から見ると二五〇七番からの引用と見られる。

『五代簡要』「ますかかみ てにとりもちて あさなさな」

二五〇七番歌は、『拾遺集』や『秀歌大体』、『定家八代抄』にも再録されており、二六四一番歌よりも人口に膾炙している感がある。『万葉集』には他にも、同じ句が卷五、九〇九（九〇四）番の長歌に見えることから、いわゆる万葉表現と言ってもよいであろう。

このように、歌句としては万葉歌に拠るとして、はたして「おきな」の要素はどこから学んだのか。おそらくその発想は、直接的には次の『永久百首』忠房詠から得たものではなかったか。

『永久百首』六四九番 「老人」 忠房

あさなあさなみれどむかしのかけならで日にそへおいの
すかがみかな

『新編国歌大観』を検する限り、「ます（そ）かがみ」「あさな（あ）さな」という表現を用いながら、老いを詠んだ歌は、この忠房詠を嚆矢とする。毎朝鏡を見る度に重なる老いを嘆くという発想と表現とを、為家が受け継いでいることが窺える。

また、為家は、『新撰六帖』六帖「かがみ」題の歌を、次のように詠んでいる。

『新撰六帖』第五帖、一六九二番 「かがみ」

みかりせぬ野もりのかがみ時にあはでうつしごころもなく
なくぞふる

この歌にある「野もりのかがみ」は、言うまでもなく『俊頼髄脳』が言及する「はし鷹ののもりのかがみえてしかな思ひおもはずよそながらみむ」(二二一番)に拠るものである。その話の一節に注目したい。

野守のおきな「(……中略……)。しばのうへにたまれる水を、かがみとして、かしらの雪をもさとり、おもてのしわをもかぞふるものなれば、そのかがみをまぼりて、(……中略……)」と申しければ、そののち、野の中にたまれりける水を、野守のかがみとはいふなり。⁽³⁸⁾

そこで「野守おきな」は、「水をかがみとして」、「かしらの雪」は「おもてのしわ」を映すという。『永久百首』の忠房歌、延いては『新撰六帖』為家歌にも、この話は通底しているように思われる。あるいは為家には、『新撰六帖』において、まず「かがみ」題には「野もりのかがみ」を用いて作歌し、その「老い」の発想をもって、『古今六帖』「かがみ」題の万葉歌を、『新撰六帖』の「おきな」題の作歌の歌材にまわす、といった思考が働いていたのかもしれない。

六 分類(二) 〈『古今六帖』無・『五代簡要』有・

『為家千首』有〉

以上、『古今六帖』所収万葉歌と為家の『新撰六帖』歌との関わりを、関連する和歌表現に目配りしながら考察してきたのであるが、為家が『新撰六帖』の作歌に際して念頭に置いたと見られる既存の表現の源泉に万葉歌が想定される時、やはり『五代簡要』の存在は小さくなかったと考えられる。それが『為家千首』で実作されていればなおさらである。以下、為家の『古今六帖』には載らない万葉歌句撰取のあり方を見てみよう。

⑭ 『新撰六帖』第一帖、一二二番「たなばた」

けふきてやたちかさぬらんあまのがはいほはたにおる雲のころもで

右の傍線部は、次の万葉歌から取り入れたものと考えられる。

『万葉集』卷十、二〇六七(二〇六三)番

アマンガハ、キリタチノボル、タレバタノ、カヘルノカモ
天漢 霧立上 棚幡乃 雲衣能 飄袖鴨

あまのがは きりたちのぼる たなばたの くものころものかへるそでかも

『赤人集』三三四番、『家持集』一〇四番にも載るこの万葉歌

は、後に為家自身が、単独撰になる『続後撰集』に採録している。⁽³⁹⁾『新撰六帖』の為家の「雲のころもで」という句は、万葉歌の下句「くものころもの（かへる）そで」を縮約した表現と見做されよう。

為家が着目したこの万葉歌句は、『五代簡要』でも引用されるところであった。

『五代簡要』「たなはたの 雲の衣」

為家が、『五代簡要』が引用する「たなはたの」の句を「たなばた」題の歌に用いなかったのは、題と同じ語を、安易に和歌に詠み込むことに抵抗があったからかもしれない。

この万葉歌は、少なくとも『古今六帖』の現存諸本には収められていない。だが、その表現は、鎌倉期を待たずとも、平安期から、「たなはたの」くものころも」として、用例が見出されるのであった。

『内裏歌合 寛和二年（九八六）』二〇番 「秋 織女或本 七夕 右 惟成」

たなはたのくものころものうらとけてぬるほどもなくあくるあまのと

また為家も『新撰六帖』以前に、『為家千首』において実作に及び、『新撰六帖』と同様の「あまのがは」と「くものころも」とを詠み込んでいる。

『為家千首』三二六番

あまのがは秋かぜさむみたなはたのくものころもや今日かさぬらん

「くものころも」は、先の万葉歌の表現の系譜に連なりながら、七夕の歌として広く継承されていく。しかも、定家の『拾遺愚草』に二例を見出す他、『為家千首』にも他に、「あまのかはなみ」とともに詠んだ例が見出されるのである。

『拾遺愚草』一五三三番

あまの川ふ月はなのみかさなれど雲の衣やよそにぬるらん

『拾遺愚草』一二三三八番 「建保三年七夕内裏七首」

天河かはとの波の秋風に雲の衣をたつやとぞまつ

『為家千首』三一九番

たなはたのくものころものきぬぎぬにかへるさつらきあまのかはなみ⁽⁴⁰⁾

ところで、『新撰六帖』の為家歌の「くものころもで」という表現であるが、為家と同時代までの例は、次のようにわずかながらあるものの、「藤」や「雪雲」を詠んだもので、七夕の歌ではない。

『範宗集』一五八番 「建保三年三月仙洞五首内 山路藤」

むらさきのくもの衣手おりはへてやまぢにかかる藤のした露

『金槐和歌集』三七一番「雪」。

まきの戸を朝あけの雲の衣手に雪を吹きまく山おろしの風
 そうすると、『新撰六帖』為家歌の「くものころもで」の詠み
 方自体は、これらの先行例とは別に、七夕の万葉歌の系譜に連
 なる表現として位置付けられよう。『万葉集佳詞』にも「く
 ものころも 七夕のくものころも」とある。

なお、この『新撰六帖』為家歌の第四句に用いられている
 「いははた」という語も、やはり万葉歌に拠るものである。『古
 今六帖』はこれを収め、『五代簡要』もこの語を引用している。⁽⁴¹⁾

七 分類（ホ） 〈『古今六帖』無・『五代簡要』有・

『為家千首』無〉

ところで、『五代簡要』にはあるが『古今六帖』にはなく、
 『為家千首』でも用いなかった万葉歌句が、『新撰六帖』為家歌
 に詠まれている例がある。

⑮ 『新撰六帖』第六帖、一九六二番「あきはぎ」

このねぬるあさかせさむしさぬ方の野べのあきはぎいまち
 らんかも

まず初二句の傍線部は、次の万葉歌から得た歌句と見てよいで
 ある。万葉歌の「あさげのかぜ」を、為家が「あさかせ」と

したのは、音数律の都合によるものと考え得る。

『万葉集』卷八、一五五九（一五五五）安貴王歌一首

秋立而アキタチテ 幾日毛不有者イクカモアラネバ 此宿流コノネスル 朝開之風者アサケノカゼハ 手本寒母タモトサムシモ

あきたちて いくかもあらねば このねぬる あさげのか

ぜは たもとさむしも

ちなみに、勅撰集では、『拾遺集』卷第三秋、一四一番にこの
 万葉歌が見える。

『五代簡要』は、この万葉歌の上三句を引用しており、第三
 句「このねぬる」を、為家は『新撰六帖』の作歌に用いてい
 る。⁽⁴²⁾

『五代簡要』「秋たちて いくかもあらねと このねぬる」

実は、「このねぬる」という万葉歌句は、『久安百首』の季通や
 隆季あたりから実作に使われるようになったらしい。

『久安百首』四三〇番「秋二十首」季通

このねぬる夜のまに秋は来にけらしあさげの風の昨日にも
 似ぬ

『久安百首』五三二番「秋二十首」隆季

このねぬるあさげの風や払ふらん嶺なき雲の空に消えぬる
 もつとも、ここでは万葉歌の「あさげの風」をもそのまま用い
 た詠になっている。

また、為家自身も、『為家千首』ではないが、この成立と同

じ貞応二年（一二二二）に、次のような歌を詠んでいる。

『為家集』上、七六七番 「秋貞応二」

かたしきの衣手涼しこのねぬる夜のまにかはる秋の初風

下句「夜のまにかはる秋の初風」は、直接的には『久安百首』季通の「夜のまに秋は来にけらし」という表現や発想に拠るところが大きからう。そうすると、「このねぬる」の万葉歌は、以上のような先行例に導かれながら為家が用いた表現と言えそうである。

そして、この『新撰六帖』為家歌の第三句以下は、次の万葉歌に拠っている。

『万葉集』卷十、二二一〇（二二〇六）番

沙額田乃 野辺乃秋芽子 時有者 今盛有 折而将挿頭

さぬかたの のへのあきはぎ ときなれば いまさかりなり
り をりてかざさむ

『新撰六帖』の為家の歌は「あきはぎ」題に収められるので、こちらの万葉歌の方が、為家の歌の主題を担っている。為家歌の第三句以下「さぬ方の 野べのあきはぎ いまちらんかも」に着目すると、この万葉歌の第四句「いまさかりなり」を、「いまちらんかも」というように、秋萩の咲き散る時節をずらして詠んでいることに気づく。つまり、為家は、先ほどの「このねぬる」の万葉歌の第三句以下を初句と第二句に用い、第三

句以下は「さぬかたの」の万葉歌を踏まえることで、一首を仕立てているのである。

ちなみに、やはりこの「さぬかたの」の万葉歌についても、『五代簡要』は、次のように歌句を引用する。

『五代簡要』「さぬかたの のへのあきはぎ」

ということは、為家は、『五代簡要』引用歌句をそのまま利用したことになる。用例は、今のところ万葉歌と為家歌の二例を見出すのみで、たいへん稀少である。実際、『古今六帖』の「秋はぎ」題の歌は、現存本では三六三三～三六五七番の二十五首が列挙されており、参考にする歌には事欠かなかったはずだが、あえてこのような珍しい万葉歌句に着目して作歌したとすれば、やはり『五代簡要』の導きがあったと考えるべきだろう。

また、『新撰六帖』「たち」題には、次の為家歌が載る。

⑩『新撰六帖』第五帖、一八二二番 「たち」

つるぎたちもろはのときかうへよりもふみとめがたき世に
こそありけれ⁽⁴³⁾

『古今六帖』では、「たち」題の歌を三四三二～三四三七番の七首列挙するが、次の万葉歌は収められない。

『万葉集』卷十一、二五〇三（二四九八）番

釵刀 諸刃利 足踏 死 死 公依

つるぎたち もろはのときに あしふみて しなばしなむ
よ きみによりては

この万葉歌は、本文異同を有しながらも『古来風体抄』にも載るところである。

『古来風体抄』二二四番

劍太刀諸刃の利きにのほりたち死にも死なん君によりて
は

とくに第三句「のほりたち」は、『万葉集』本文および訓とは大きく外れるが、『五代簡要』は、この第三句本文を含む上句を引用する。

『五代簡要』「つるぎたち もろはのときに のほりたち」
『新撰六帖』の為家歌は、『五代簡要』が引用する初二句を、句の位置もそのままに用いているのである。

実は、「つるぎたち」「もろはのとき」の用例は、『新編国歌大観』に拠れば、前掲の万葉歌の再録と『新撰六帖』為家歌以外、他例を見ない。言い換えれば、万葉歌以来、実作を見るには、『新撰六帖』を俟たねばならなかったというわけである。為家は、六帖題をきっかけに、『五代簡要』で学んだ表現を用いて実作に及んだものと考えられる。

続いて『新撰六帖』「やなぎ」題の歌を見よう。次の万葉歌の表現が踏まえられているようである。

⑬ 『新撰六帖』第六帖、二三四七番 「やなぎ」

かぜさむみ雪はちりつつしかすがになびきそめたるあをや
ぎの糸

『万葉集』卷十、一八五二（一八四八）番

山際ヤマノハニ 雪者零管ユキハフリツツ 然為我シカスガニ 此河楊波コノカハヤナギハ 毛延尔家留可聞モエニケルカモ

やまのまに ゆきはふりつつ しかすがに このかはやぎ
は もえにけるかも

この万葉歌は、『赤人集』の他、定家の単独撰になる『新勅撰集』にも採録され、⁽¹⁴⁾『五代簡要』も歌句を引用している。

『五代簡要』「ゆきはふりつつ しかすがに」

為家歌は、まずこの『五代簡要』引用歌句を踏まえつつ、万葉歌にも詠まれている「やなぎ」詠を仕立てている。雪がちらつくと言ってもやはり、柳は芽吹き春を告げるという趣向である。「ゆきは……つつ」「しかすがに」という表現を用いた「やなぎ」の歌は、『新編国歌大観』では以上の用例のみである。

その上で、もう一首、万葉歌に注目してみたい。

『万葉集』卷十、一八四〇（一八三六）番

風交カゼマツリ 雪者零ユキハフリツツ 然為蟹シカスガニ 霞田菜引カスミタナヒキ 春去尔来ハルサリニケリ

かぜまじり ゆきはふりつつ しかすがに かすみたなび
き はるさりにけり

この万葉歌は、『新古今集』や『秀歌大体』にも再録されている

(45)るが、上句が先の『万葉集』一八五二番に似通っているためか、『五代簡要』には引用されない。

「ゆきは……つつ／しかすがに」という箇所は、先の万葉歌と一致しており、万葉歌の表現パターンとして認識しておいてもよいだろう。その上で、『新撰六帖』の為家詠は、春の到来を「なびきそめたる あをやぎの糸」の情景に置き換えた、万葉歌の変奏とも解されよう。そして、「ゆきは……つつ／しかすがに」という表現に、初句の「かぜ」が加わる例は、他例を見ないことから、この万葉歌と『新撰六帖』為家歌の表現や発想の緊密なつながりが指摘される。為家が、ここでも『五代簡要』を手掛かりに詠歌した可能性が指摘できよう。

八 分類（へ）〈『古今六帖』無・『五代簡要』無・

『為家千首』無〉

前節で考察してきたように、為家が『五代簡要』から学んだ跡は、『新撰六帖』の随所に見出される。だがそれでも、『古今六帖』はもとより『五代簡要』から踏み出した跡もまた、検証しておく必要があるだろう。たとえば、次のような歌である。

⑱ 『新撰六帖』第五帖、一五七二番 「いへとうじをおもふ」

わがやどのいもがてなれのますかがみめつらしげなくなほ

見まくほし

『万葉集』卷八、一六三二（一六二七）番

大伴宿祢家持攀トキナラヌラヂ非時藤花并芽子黄葉二物贈イマモミテシカ坂上大嬢歌二首

吾屋前之ワガヤドノ非時藤之トキナラヌラヂ目頬布メツラシク今毛見壯鹿イマモミテシカ妹之咲容乎イモガエマヒツ

わがやどのときじきふちのめつらしくいまもみてし

か いもがゑまひを

為家歌は、傍線部の歌句を、ほぼこの万葉歌に拠って作歌していると考え得る。その組み合わせは、『新編国歌大観』でも他に見出せず、それだけ緊密な表現上の関係が窺える。

『古今六帖』では「いへとうじをおもふ」という題で、二九八五〜二九九四番の十首の歌を載せる。このうち万葉歌は四首、『古今集』歌は一首、『貫之集』歌は一首、残り四首は出典未詳歌と見られ、必ずしも歌数が少ないわけではないが、その範囲を越えた歌作りの姿勢が窺える。「てなれ」といえば、「こと（琴）」が『万葉集』巻第五、八一五（八一）番でも詠まれているが、「ますかがみ」というのは、いささか唐突な感もある。この点においては、あるいは『古今六帖』の「かがみ」題に収められた「ますかがみ」詠が、⁽⁴⁷⁾作歌の一助になったかもしれない。

また、次の例も、為家歌と万葉歌の直接的な表現の近さが指

摘されよう。

⑱ 『新撰六帖』第三帖、一一六七番「しま」

あはぢしまとわたる舟のなぐ塩におもひさだめず行くこ
ろかな

『万葉集』卷第十七、三九一六(三八九四)版

淡路嶋 刀和多流船乃 可治麻尔毛 吾波和須礼受 伊敝
乎之曾於毛布

あはぢしま とわたるふねの かぢまにも われはわすれ
ず いへをしぞおもふ

この万葉歌は、『麗花集』八〇番、『五代集歌枕』一四九一番にも見えるが、「あはぢしま」「とわたるふね」という歌句の用例は、『新編国歌大観』内では次の歌を見出すのみである。

『新勅撰集』卷第十九、雑歌四、一三三四番

家に十五首歌よみ侍りけるに、晚霞隔浦といへる心を

よみ侍りける 中院入道右大臣(源雅定)

あはぢしまとわたるふねやたどるらむやへたちこむるゆふ
がすみかな

定家単独撰のこの『新勅撰集』所収歌が、先の万葉歌の素材を受け継いでいると見られるが、為家歌は万葉歌と同じく第四句末尾に打消「ず」を用いており、雅定歌を介在させたにしろ、やはりこの万葉歌が念頭にあったのだろう。

これら⑱⑲の例は、為家が『万葉集』から直接学んだ歌句を用いたとも推定されそうだが、その類の用例は存外少ない。以下の⑳から㉒の例も、本節の分類(へ)に相当するが、『万葉集』から直接学んだというよりは、万葉歌の勅撰集・私家集・歌論書における再録や、為家に先行する万葉表現に依拠した和歌の用例からの影響が推察される。順に考察してみよう。

㉒ 『新撰六帖』第六帖、二五八七番「ほととぎす」

我が宿にかたらひきなくほととぎすものおもふことはなれ
もかなしや

『万葉集』卷十五、三八〇四(二七八二)番

安麻其毛理 毛能母布等伎尔 保等登芸須 和我須武佐刀
尔 伎奈伎等余母須

あまごもり ものもふとときに ほととぎす わがすむさと
に きなきとよもす

実は、「ほととぎす」と「わが」「きなく」「もの(お)もふ」との組み合わせは、案外用例が少ないが、『新編国歌大観』では、『赤人集』に次の一首を見出す。

『赤人集』二二六番

ものおもふとねざるあさけにほととぎすわがころもで
なきをりつつ

この為家歌の場合、特徴的な万葉歌句を部分的に取り入れたと

いうよりは、語の組み合わせを踏まえた作りと言えそうである。『古今六帖』には、四四一二～四四五三番に四十二首もの「ほととぎす」題の歌が収められているが、為家の眼はその外にある、仮名書き万葉ともいべき『赤人集』にも向けられていた可能性を考慮すべきであろう。

② 『新撰六帖』第六帖、二二三二番「かへ」

しめのゆき紫のなるかへのもりはがへずながらうづもれにけり

『万葉集』巻第一、二〇(二〇)番

天皇遊^ニ獨蒲生野^ニ時額田王作歌

茜草指^{アカネサス} 武良前野逝^{ムラサキノユキ} 標野行^{シメノユキ} 野守者不見哉^{ノモリハミズヤ} 君之袖布流^{キミガソデアフル}

あかねさす むらさきのゆき しめのゆき のもりはみず

や きみがそでふる

この万葉歌は、『奥義抄』三四四番、『五代集歌枕』七一六番、『和歌初学抄』九四番、『色葉和難集』五一八番・七九七番といった歌学書に取り上げられ、人口に膾炙している歌であるが、為家が直接発想を得たのは、次の家隆の歌であろう。

『壬二集』八一八番

(院百首建保四年、于時宮内卿従三位正月五日叙之)
(春)

いざや君袖ふりはへてすみれ草むらさきの雪しめのゆきみ

ん

ここから、万葉歌における「紫野行」を「紫の雪」に取りなす視点を、為家歌は継承したのである。後の文応元年(一二六〇)にも、為家は、これと同じ趣向の歌を詠んでいる。

『為家五百首』三八番「(のこりのゆき)」

きえやらぬむらさきのゆきしめのゆきそれかとまがふはるのゆふぐれ

『新撰六帖』の為家歌は、後に『現存六帖』五二四番に再録されることになるが、やはりこのあらたな詠み方が目に止まったゆえのことであろう。

② 『新撰六帖』第五帖、一四二七番「ものへだてたる」

秋の夜のくもがくれゆくそらの月見ぬはゆかしき君にもあるかな

『万葉集』巻第十、二三〇三(二二九九)番

秋夜之^{アキノヨノ} 月疑意君者^{ツキカモキミハ} 雲隠^{クモガクレ} 須臾不見者^{シバシモミネバ} 幾許恋敷^{ココロコヒシキ}

あきのよの つきかもきみは くもがくり しましくみね

ば ことごこひしき

最後は、『拾遺集』七八五番、『人丸集』一五六番にも見える万葉歌である。十一世紀初頭にはある程度注目されていたようであるが、その後はとくに歌学書にも採られない。その「あき」「よ」「くもがく(れ)」「つき」「きみ」の組み合わせとしては、

『新編国歌大観』では『新撰六帖』の為家歌が、かろうじて見出される。この場合も、『拾遺集』の他、⑳の『赤人集』と同様に『人丸集』を介して想起された可能性も想定すべきであろう。

九 おわりに

為家が、『新撰六帖』詠作に際し、万葉歌の表現を用いるにあたっては、『五代簡要』が引き続き生かされているようである。分類(口)⑤「たち花」では、『古今六帖』本文より『五代簡要』引用歌句に一致し、また、『古今六帖』に収められない万葉歌句でも、それぞれ表現の系譜を背景としながら、『五代簡要』が示す万葉表現が用いられている(分類(二)⑭「たなばた」、分類(ホ)⑮「あきはぎ」・⑯「たち」・⑰「やなぎ」)。その一方で、分類(ハ)⑨「をはぎ」の例において、『五代簡要』引用歌句「あゆの風」を為家は用いない。この歌句は『万葉集佳詞』にも引用されておらず、「越俗語」であることがその理由であったかもしれないが、そこには、『五代簡要』を基礎としながら万葉歌句が篩い分けられていく形跡を垣間見ることができようか。

一方、『古今六帖』において掲載歌数が少ない歌題の場合、

六帖題のみが継承している万葉歌句があり、それをそのまま『新撰六帖』の為家が同題詠に用いた例が目につく(分類(イ)①「しひ」、分類(口)④「にこぐさ」・⑥「なつむし」、分類(ハ)⑦「あせみ」・⑨「をはぎ」・⑩「かも」)。もともと、④⑥は『五代簡要』にも載る歌句であるから、その点を差し引いて捉える必要があるだろうが、⑦⑨⑩の他、分類(ハ)⑧「にほ」・⑫「かも」の用例からは、『五代簡要』にない『古今六帖』所収万葉歌の存在が、為家の作歌の契機になった可能性を指摘することができよう。

そして、分類(イ)の①、分類(口)の④⑥、分類(ハ)の⑨⑫の為家歌は、後の『現存六帖』にも入集されることになるのだが、六帖題和歌にかろうじて継承されているそれらの万葉表現が、『現存六帖』以降、新たに詠み継がれた例がおよそ見出されないことに留意しておきたい。

さて、それでは為家が、『万葉集』そのものから直接学んで作歌した形跡はあるのか、言い換えれば、『万葉集』を直接見なければ得られないような稀な表現や歌語の組み合わせを追究している跡があるかと言えば、それは存外少なく、分類(ハ)⑱「いへとうじをおもふ」・⑲「しま」を挙げるに止まる。もとより用例収集の不備を恐れるが、今後、『新撰六帖』の他の歌人との比較検討が必要だろう。

分類(へ)の残り三首(20)「ほととぎす」・(21)「かへ」・(22)「ものへだてたる」には、為家歌の背後に、依拠したと考えられる歌や表現の系譜がある。この傾向は、分類(イ)②「もず」・③「しめ」、分類(ハ)⑪「なつの」・⑬「おきな」や、分類(ニ)の前掲⑭、分類(ホ)の前掲⑮⑯⑰にも見出されるところであった。そうすると、『五代簡要』引用歌句はしばらく措くとしても、為家はそれらの歌句を果たして万葉表現と認めて用いたのかどうか。この点も、中世和歌という時代性の中で吟味する必要があるだろう。

このような『新撰六帖』における為家の万葉学びの様相は、万葉歌を収める『古今六帖』の「作歌の手引き書」としての役割の終焉を示唆しているように思われる。こうして、『古今六帖』は、新たな類題和歌集の編纂材料、出典考証の対象へと移行していくことになるのであろう。

附記

本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」(同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究(二〇一九〜二〇二二年度)、および「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータベース教材への活用」(科学研究費助成事業基盤研究(C)課題番号20K12565、二〇二〇〜二〇二二年度)の一部であり、和歌文学会関

西例会十二月例会(二〇二二年十二月十八日)にてその骨子を発表したものである。

なお、用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏(九州大学大学院システム情報科学研究院)作成の文字列解析器 *e-GSA Ver.2.003* を使用した。

注

(1) 拙稿『新撰和歌六帖』における『古今和歌六帖』出典未詳歌の受容と継承」(『語文研究』第一三〇・一三二号合併号、二〇二一年六月)。

(2) 佐藤恒雄氏「藤原為家の初期の作品をめぐって——「千首」を中心に後代との関わりの側面から——」(『国文学言語と文芸』第六四号、一九六九年五月。後に『藤原為家研究』(笠間書院、二〇〇八年九月)所収)。

(3) 『新編国歌大観』「為家千首」解題(佐藤恒雄氏)。

(4) 今井明氏「為家卿千首」を通してみる『五代簡要』の位置——その万葉集撰取の場合」(『香椎湯』第四二号、一九九七年三月)では、次の二点が指摘されている。

①『千首』の中で為家が撰取した万葉歌は、そのすべてが『五代簡要』に含まれること。

②『千首』の中で為家が撰取した万葉歌の歌詞は、そのすべてが『五代簡要』が当該万葉歌から抄録した歌詞と一致すること。

(5) 福田智子・南里一郎・竹田正幸「古典和歌データベースの増補とその活用」(『人文科学とコンピュータシンポジウム』二〇〇二年九月)に拠る。

- (6) 『新編国歌大観』所収、日本大学総合図書館蔵伝飛鳥井雅網・近衛種家筆本末尾の記述「後記」に拠る。『同』「新撰和歌六帖解題」（安井久善）に拠れば、「後記」によって各人の詠歌時期が、寛元元年（一二四三）一月から、翌二年六月までの間にわたっていることが判明し、さらに合点を加えたり、改作やさしかえが行われて「寛元二年六月からある程度の期間をおいた時期」に成立したとされる。
- (7) 佐藤恒雄氏「新撰六帖題和歌の成立について」（香川大学教育学部研究報告）第一部第四十九号、一九八〇年三月。後に注(2)前掲書所収。
- (8) 安田徳子氏「『新撰六帖』の為家詠の性格をめぐって」（松村博司先生古稀記念国語国文学論集）笠間書院、一九七九年十一月）では、「為家の歌の表現の典拠となったもので、最も注目されるのは、『万葉集』の表現で、その数は六十例に達する。」（一九九頁）と指摘されている。同論文には、そのすべての用例が列挙されているわけではないが、本稿で取り上げる例が指摘されている場合には、注を付して示す。
- (9) 以下、和歌の引用は、特に断らない限り、『新編国歌大観』CD-ROM 版 Ver.2 に拠る。傍線筆者。論述の順に従って、細線、波線、太線を順に用いる。
- (10) 『古今六帖』「しひ」題の歌、四二六一～四二六三番のうち、最後の四二六三番は出典未詳歌、残りの二首は万葉歌である。
- (11) 同じ訓は、『校本萬葉集』の底本である寛永二十年版本にも見られる。
- (12) 以下、『万葉集』諸本の本文異同については、『校本萬葉集』に拠る。
- (13) 以下、『古今六帖』諸本本文は、黒田彰子氏『古今和歌六帖の本文と享受に関する総合的研究』（科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書、二〇一〇年度～二〇一三年度、課題番号22520209）において作成された主要伝本十三本の校本に加え、適宜、影印に拠る。
- (14) 以下、『五代簡要』の引用は、冷泉家時雨亭叢書37『五代簡要 定家歌学』（朝日新聞社、一九九六年四月）に拠る。
- (15) なお、『新撰六帖』「しひ」題の家良歌、「むかつをのしひのこやでの世にふれば人のこころにあひたがはめや」（二二九六）は、『万葉集』卷十四の「於曾波夜母 奈乎許曾麻多売牟可都乎能 四比乃故夜提能 安比波多家波自／おそはやもなをこそまため むかつをの しひのこやでの あひはたがはじ」（三五・三三・三四九三）の歌句を用いていると考えられる。『古今六帖』の「しひ」題の中には、「おとはせん君をばまたんむかへをのしひの」^一（四二六二）という和歌本文があり、写本系本文には脱文があつて判断しにくい^二が、本来は、先の万葉歌の異伝歌、「於曾波夜母 伎美乎思麻多武 牟可都乎能 思比乃佐要太能 登吉波須具登母／おそはやも きみをしまたむ むかつをの しひのさえたの」ときはすぐとも」（三五・一四・或本歌曰）を収めていたのであろう。あるいは、先の『万葉集』三五・二三番歌も並記していたか。後に『古今六帖』寛文九年版本は、「おそはやも君をはまたむむかつをのしひのこやでのあひはたか

- し」という、『万葉集』三五一四番の上句と、三五一五番の下句を組み合わせた本文に改訂している。
- (16) ただし、景井詳雅氏『万葉集佳詞』考——その本文から問い直す——(『和漢語文研究』創刊号、平成十五年十一月)では、現存本には冷泉為秀や円雅の手が加わっている可能性を指摘する。
- (17) 以下、『万葉集佳詞』の引用は、宮内庁書陵部蔵 [4397211 鷹432] に拠る。
- (18) 佐藤恒雄氏、注(7) 前掲論文参照。
- (19) 為家の『新撰六帖』「たまくら」歌は、「たまさかにかはすも袖はくちぬべしなみだをかけてむすぶたまくら」(一七〇二番)である。
- (20) 『為家集』には、「引きむすぶあしのかりねの夜の雨になみだかたしきみる夢もなし」(下、雑、一四〇一番、洲蘆夜雨他郷涙 正嘉二年(二二五八))という歌が載る。
- (21) 「あしがきの中のにこ草にこよかにわれと多みして人にしらるな」(巻第二十八・雑歌十・一三五一四・人丸・爾許草／題しらず、万十一)。
- (22) 拙稿『古今和歌六帖』が目指したのも——万葉歌を通して——(『和歌文学研究』第一二二号、二〇二二年六月) 参照。
- (23) 詳しくは、注(22) 拙稿参照。
- (24) 『古今六帖』「あせみ」題の歌は、すべて万葉歌である。本節で取り上げた四三二九番の他、四三三〇番は、『万葉集』巻十、一九〇七(一九〇三)番、四三三二番は、『万葉集』
- 巻十、一九三〇(一九二六)番。いずれも『五代簡要』には引用されていない。
- (25) 神宮文庫蔵林崎文庫本「あをみのはな」。この場合、「を」は、「を」(字母「遠」と「せ」(字母「世」)との字形の類似による誤写であろう。
- (26) 注(8) 安田氏論文(二〇一頁)では、為家の『新撰六帖』における「目に立つ表現」として、「同音反復」が指摘され、この歌の国歌大観番号が示されている。
- (27) なお、廣瀬本の片仮名別提調は「^カツグ」と標記する。「スタク」を「カツグ」と訂正したものであろう。ちなみに、「カツグ」の「ツ」の一・二画目は、「スタク」の「ダ」の濁点をそのまま用いて記したもののように見える。
- (28) 詳しくは、注(22) 拙稿参照。
- (29) 『現存六帖』二四三番「をはぎ」、第四句「このめはる風」。
- (30) 『古今六帖』写本諸本は題を欠く。版本「をはぎ」。
- (31) 『校本萬葉集』では他に類聚古集が「おわき」とし、仮名表記の違いがある。
- (32) 『人丸集』六五番では第二句「夏の草と」、『赤人集』二五三番「くさによす」題では、第二句「なつのくさに」、『拾遺集』巻第十三恋三、八二七番では、「人まる」歌として、第四句「君と我とし」という本文で収められている。
- (33) 『現存六帖』五四二番、「むめ」題、下句「あかぬにほひもきてもみるがに」。
- (34) 『後撰集』巻第一、春上、二二二番、『赤人集』三番、『家持

- 集』一一番、『金玉集』七番、『和漢朗詠集』九四番、『三十六人撰』四五番（赤人）、『深窓秘抄』九番、『俊頼髓腦』四〇番、『袖中抄』一八九番など、平安中期から再録されている。
- (35) 『万葉集佳詞』は、「わかせこに見せむとおもひし」の部分を用用する。
- (36) 『言葉集』一五六番、『寄梅花』にも。ただし下句「そひやとがむるそでのかならむ」。
- (37) 『八丸集』二〇一番、『拾遺集』八五七番、『定家八代抄』一一六四番、『秀歌大体』九八番など。
- (38) 本文の引用は、『日本古典文学全集』に拠る。
- (39) 『続後撰集』巻第五秋歌上、二六〇番、「七夕のころを人磨」。第二句「霧たちわたる」。
- (40) 後に『新拾遺集』巻第四秋歌上、三四三番に再録される。
- (41) 『万葉集』巻第十、二〇三八（二〇三四）番。『古今六帖』第五帖、三二五七番。『五代簡要』「たなはたの いほはたたててをるはた」。『為家千首』に実作例はなく、『新撰六帖』に至るまで、『林葉集』三六五番歌の異文に認められるものの、用例はごく少ない。
- (42) 『万葉集佳詞』「秋たちていくかもあらねとこのねぬるあしたの風はたもとさむしも」。「このねぬる」以下は小字である。
- (43) 注(8) 安田氏論文(二九九頁)に指摘がある歌である。
- (44) 『赤人集』一四七番、初句「やまもとに」、下句「このかはやなぎもえにけるかな」。『新勅撰集』巻第一春歌上、二二二

- 番、「題しらず」山部赤人、初句「山もとに」、第四句「このかはやなぎ」。
- (45) 『新古今集』巻第一春歌上、八番、「題しらず（よみ人しらず）」、初句「風まぜに」、結句「はるは来にけり」。『秀歌大体』一三番、初句「風まぜに」、結句「春はきにけり」。
- (46) 万葉歌は、『古今六帖』二九八五番（『万葉集』六八）・二九八七番（『万葉集』三一六八、催馬楽「我が駒」）・二九八八番（『万葉集』七六八）・二九九一番（『万葉集』六五四）・古今集歌は、『古今六帖』二九九〇番（『古今集』六八九）、貫之集歌は、『古今六帖』二九九四番（『貫之集』四五六）、そして出典未詳歌は、二九八六・二九八九・二九九二・二九九三番である。
- (47) たとえば、「ますかがみたえにしいもをあひみねばわがこひやまずとしはふれども」（古今六帖・第五・三二二〇・かがみ）という歌がある。

（第20期第3研究会による成果）